Stone of Thousand Unmovable and Stone of Ascent to Heaven : almost forgotten legend stones

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24023

千引石と登天石――忘れられつつある石の伝承について――

野﨑　準

一．はじめに
二．千引石とそれにまつわる物語
三．千引石と「つぼの石ふみ」
四．登天石と渡天石
五．忘れられつつある自然石にまつわる伝説
六．おわりに

一．はじめに

自然の石に関する伝承について考察したい。これは遠くからも見える巨岩や岩壁のような大きなものではなく、「なぜこんな石が？」と思われる大きめなだけで何の特色もない石が伝説によって特別な扱いを受け信仰の対象になる例である。

全く個人的な追憶で恐縮だがはじめての考古学のフィールドで貝塚を発掘した時、貝層に達する前の表土中から数個の自然石が出土した。加工痕はなく遺跡にも遺構にも関係ない石だと何気なく取り除こうとして、ご指導の故加藤孝本学教授（当時は助教授）から「なぜその石がそこにあるのか。人工を加えられていない石でもこの辺にある石ではない。自然物でも尋常ならざる物はすべて遺跡との関係を十分観察してから除去するように」というご指示を受けた。

その石は後世に運び込まれた自然石として除去されたが、その後は遺跡内部の大きめの石は注意して取り扱う様になった。実際竪穴住居の炉の周縁に置かれた石、竪穴内の立石など加工痕のない石にその後出会うこともあった。

そのため石造文化財の調査などで遺跡の中心や背後に自然石や地山の岩石の露頭を見た時にも、加工されていなくても尋常ならざる岩石は何かの信仰に係るものではと意識して見るようになった。仏教考古学でも古代の観音の霊場は山中の巨岩露出地に多いことは古くから注意されている。

それと同様に尋常ならざる巨石以外にも、社寺の境内などに「なぜこの石が」と思うような普通の大きめの自然石に柵がめぐらされ祭壇がしつらえられて説明板が建てられている例にも出会うことがあった。更に興味深いことには肝心の石がすでに行方不明なのにその石にまつわる伝説だけが独り歩きし、民話伝説どころか古代、中

世の歌論、物語、謡曲にまで取り上げられているものもあった。これらは考古学ではもちろん民俗学や国文学でもまともに扱われておらず、語り伝えが消えてしまえば永久に忘れられてしまうだろうと、細々集めていた資料の中から、みちのくの歌枕に関係のある「千引石」と、「失礼ながらなぜこんな石が？」と思われる一例としての「登天石」を取り上げて資料を集めてみた。

故大場磐雄博士は神道考古学の入門書『まつり』（註一）に「石の神」の章を設けられ、石崇拝の例として

（霊のある岩は）わが国の古典ではその形態や信仰の上から石神・磐座・磐境などとよんで区別しており、また民俗学上からよばれるものには夫婦石・姥石・鬼石・影向石・手形石、・馬蹄石・疣石・要石・鏡石・腰掛石…等数え上げたらきりがないほどである

と書かれておられるが、ここで取り上げるのはこの「きりがない」と省略された部門に属するもので、考古学・民俗学・石造文化財研究の隙間の分野である。御専門の先生方には礼を失するが、今や忘れられつつある分野の報告でもあるのでご寛恕をお願いする次第である。

（註一）大場磐雄『まつり――考古学が探る日本古代の祭』学生社　昭和四二年

二、千引石とそれにまつわる物語

日本神話には「千引石」という石が登場する。これは『古事記』『日本書紀』の神代巻に見られ、『古事記』では伊邪那岐命が黄泉国から戻り、黄泉比良坂で追ってきた伊邪那美命を「爾千引石引塞其黄泉比良坂」と巨石を以て塞ぎ、問答をする場面に登場する。この石は諸書の注釈に「千人もかかって引くほどの大きな石」とされ、黄泉の軍などの異界の悪霊の現世への侵入を防ぐものとされている。『日本書紀』では「千人所引盤石」「盤石是謂泉門石」とある。

『万葉集』巻四の七四三「大伴家持、坂上大嬢に贈れる歌十五首」の一つに

吾戀者　千引乃石乎　七許　頸二将繫母　神之諸伏
わが恋は千引の石を七ばかり　首に懸けむも神の諸伏（もろふし）
（佐々木信綱氏注釈による、最後を「神のまにまに」と読む説もある）

と、恋の重荷は千引の石の更に七倍であると歌っている（註二）。

この石は想像上のものか、天の岩戸の扉石のように全国各地に「この石のことであろう」と「ご当地」を主張する例があるのかは不明であるが、巨石を千引、あるいは千曳と称する例は島根県（出雲町）などにあり、京都の近くにも例がある。

京都の名所案内『京羽二重織留』（註三）に現在の京都市の南、宇治市に近い日野に鴨長明の方丈の跡地あり、として、

「方丈石。日野の外山にあり。伝云此所鴨長明方丈の室ありし所なり。今大きな石あり、其おもて平にして方丈余あり。此辺の者は千引の石と云。此石にのぼると西南一望の中にありて絶景の地なり。

この「千引の石」は『名所都鳥』、『都名所図会』『山城名勝志』などにも「千人石」「其上平にして数十人を座す」などと書かれている。

鴨長明『方丈記』には著者の自作した解体・組み立て容易な小庵が記載され、ゆかりの下賀茂神社境内の河合神社には推定復元した方丈が屋外に建てられている。住まいは方一丈（約三メートル）あれば足りる。と製作し、場所が気に入らないとすぐ解体して移住した、という草庵が不動不変の象徴のような巨岩のそばにあったというのが都人の興味をそそったのであろうか。また方三メートル程度もあれば「千引の石」だと思われていたのも興味深い。

さて、次は中世の「千引の石」の話である。『室町時代物語大成』第九に「つぼの碑」という絵巻物になった物語が掲載されている（註四）。

物語番号は二八〇、天理図書館所蔵で二軸の絵巻物であるとされ、図版はなく詞書のみ活字化している。制作年代にはふれていない。

物語の大要は

「奈良の帝の世に陸奥の国けふの郡（野崎註：歌枕「けふのせば布」に因む架空の地名だが国府の近くなので宮城郡のことか）におもて四、五丈の大岩があった。坂上田村麻呂が悪路王を退治した時に『日本中央』と矢尻で彫った石である。

長い間近隣の住民に崇められていたためか精霊が宿り、さまざまな妖しいことが起きた。そこで国の守護、甲斐の某はこの石を他国の境まで引き動かし、千々に砕いて捨てようとし、里人の男女を問わず十五から六十までの者を招集した。

けふの郡に一人の女がいた。両親に死別され一人暮らしだったがある夜美しい男が通ってくるようになり三年が経過していた。守護の命令で女も石引きに出なければならぬ、恥をさらすより逃げ出そう、と男に相談すると、男は

『それがしは実はその石の精魂である。木石心なしとはいえ時を経ては精魂がこもることもある。明日あの石を千人で引くが動くことはない、しかしお前が引けば坂を車の下るようにたやすく動かせるようにしてやる。これが今生の別れだがお前のことは四世にわたり守ってやる』と言った。

翌日里の人々千人がこの石を引いたが動かない。そこで「つぼの石」は「千引の石」と呼ばれるようになった。しかし女が一人で引くと巨石は坂を下る車の如く、流れに棹さす船よりも早く動いた。

守護の甲斐某は女の話を聞いて感動し所領と宝を与え、鍛冶番匠を召して屋敷を建てかえた。女は国司の妻となり幸福な余生を送った。心を正直に持てば必ず果報があるものである」

石の精が正直な女性を助けた、という物語で、同じ話は能にも宝生流の『千曳（千引き）』があった。明治時代に廃曲になったため現代の謡曲集には掲載されていないがインターネットのデジタルアーカイブではいくつかの謡本が紹介されている（註五）。内容、登場人物はこの室町物語と同じで、娘と石の精との語り合いが中心になっている。

能には冒頭「陸奥の壺の碑を知行つかまつる甲斐守」が登場するが、その後は「千引きの石」という巨石があると続き、相互の関係はないようである。

これに対して室町物語の『つぼの碑』には千人で石を引いたが動かなかったと記した後に「この千人がとりつきつつ引ゆへにつぼの石をば千引の石とは申なり」、すなわち「千引石とは歌枕の『壺の碑』のことだ」としている。

（註二）澤瀉久孝『万葉集注釈』巻四　中央公論社　昭和三四年　佐佐木信綱「新訂新訓　万葉集』上巻　岩波書店　一九九四年版

（註三）『京羽二重織留』新修京都叢書　第二巻、新修京都叢書刊行会　昭和四四年

（註四）横山　重・松本隆信編『室町時代物語大成』第九、角川書店、昭和五六年

（註五）国立国会図書館デジタルコレクション【宝生流謡曲】本一一「千引き」など

三、千引石と「つぼの石ふみ」

みちのくの歌枕の内、実物が不明で古来論争の種となっているものに「つぼの石ふみ」があることは有名である。古く平安時代末の『袖中抄』に（註六）

いしふみ

いしふみや　けふのせはぬのはつはつに　逢ひ見てもなほあかぬけさかな

顕昭云、いしふみとは陸奥のおくにつものいしふみあり。日本の東のはてといへり。但田村将軍征夷之時　弓のはずにて石の面に日本の中央のよしを書付たれば石文と云ふと云へり。

信家侍従の申しは石の面長さ四五丈許なるに文をゑりつけたり。其所をばつぼと云と云々。それをつもとは云なり。

私云　みちの国は東のはてと思へど　えぞの島々は多く千島とも云は陸地を云はむに日本の中央にても侍るにこそ。

本書には「しほがまのうら」を筆頭に「とふのすがこも」「たけくまの松」「するのまつ山」「にしき木」「しのぶもぢずり」などみ

ちのくの歌枕多数も論じているが、都の歌よみが常識として記憶すべき事の説明と「聞き書き」である。本書の「いしふみ」の編者による解説は「青森県上北郡天間林村にあったという古碑、また宮城県多賀城の碑とも」とし、江戸時代には多賀城の碑とされているが時代が違う事、他の歌論書には『八雲御抄』に名前が見えるのみ、としている。

江戸時代に仙台藩の宮城郡市川村、現在の宮城県多賀城市で「多賀城碑」が発見されたと伝わると、古代陸奥国府で征夷の拠点であった多賀城の所在地でもある地の奈良時代の石碑、というのでこれが「壺の碑」であろうと考証された【図版一】。特に松尾芭蕉が『奥の細道』で碑文の一部引用と、他の歌枕は歳月の経過により遺跡も確かではないが「ここに至りて限りなき千載の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羇旅の労を忘れ泪も落るばかりなり」（註七）と感激を書き記したために更に有名になった。

【図版一】多賀城の碑　昭和41年撮影

ただ奈良時代の石碑ではあるが歌枕の「つぼの石ふみ」は平安時代初期の坂上田村麻呂の故事が伝わるのに碑文はそれより古い天平宝字六年（七六二）で時代が違う、「日本中央」とは書いていない、高さは六尺余りで四～五丈（約十二～十五メートル）ではない、と議論が百出し、重文指定の時は「多賀城の碑、歌枕のつぼの碑とは無関係」の扱いとなった。

この碑が論争の対象になっていた江戸時代にさらに北、当時の南部領にも「つぼ」の地名があり、碑の伝承があることが知られた。天明年間に奥羽松前巡検使に随行した古川古松軒の『東遊雑記』（註八）に野辺地の近く、津軽と南部の境あたりに「千引明神」があり、除地のため古くからの巡検所である、として神主の山伏教岩坊の伝えとして、

「北から来る鬼との境を示す石があり、鬼が埋めてしまったのを神々が掘り返して坪村に据えた。後に坂上田村丸が鬼を皆殺しにして、もう石は不要と再び埋めた所がこの神社である。その時石を千人で引いたので千引明神という」

と紹介している。そして歌枕の津軽の奥にあるという「つぼの石ふみ」はここの事で、仙台藩宮城郡市川村の碑は多賀城の門前の「坪」に置かれた「つぼの碑」である、と考証、後に仙台領を巡検した折にも多賀城の碑で同様の考察を述べている。

この伝承は有名となり盛岡藩の『御邦内郷村誌』巻五（註九）に

○千引明神　大同二年田村将軍云建

俚俗伝曰　明神ハ石ノ精ニシテ美男ニナル。壺子トイヘル女ニ逢フ。津保ハ父母モナク独住ノ女也。或夜男来テ暇乞也トテ落涙ニ依テ壺子何故也ト問ヘバ、我ハ石ノ精ナリ、明日土中ヘ埋候ベシ、タトヘ千人ニテ引トモ動スニ非ズ、其方出テ引出スハ心ノ侭ニ引ルベシト云。

翌日大勢ニテ彼石ヲ引ケルニ不動。村中出テ引供猶不動、其村ニ不出者壺子許也、村ノ者ニ壺子ヲ呼出引セケルニ終ニ引。依テ壺ノ石ト謂。

明神祝殿ノ下七尺許掘リ右ノ石ヲ埋ト云。

女ノ居所ヲ壺村ト云。此村天満館ノ小名也。千引明神ハ野辺地ト七戸ノ境ナリ、千曳明神ハ甲地村ノ内ノ小名ナリ。

と書かれている。話が整いすぎ、室町物語や謡曲の「ご当地」として脚色した気配が感じられるが、古地名「壺村」が古くから津軽の「つぼ」ならば「つぼの石ふみの故地では」と注意されていた上での脚色であろう。

この伝説は盛岡藩で文書化されていたので古くから知られ、民俗学の中山太郎『日本民俗学辞典』（註一〇）でも

チビキイシ（千引石）　陸中三戸郡松村千引明神は石の精にして美男となって壺子といふ女に逢ふ。此女石を引きしに軽く動くと云ふ（封内郷村誌）。按に千曳の石、伊勢物語にもある。

と報告されている。

最近の地名事典にもこの伝説が報告されているが、歌枕の「つぼの石ふみ」にするには、坂上田村麻呂の活躍した地より北過ぎること、明治に千曳明神を発掘調査してみたが碑の破片も見つからなかった事。いま「日本中央」と書かれた石碑があるが、「表四～五丈」もある巨石ではないこと、などから、弘仁二年（八一一）の文屋綿麻呂が「都母の蝦夷を討った」事件と混同されているのでは、などと追記されている。

それでは『袖中抄』の時代に都人に記憶されていた「みちのくのつぼの石ふみ」は幻なのかというと、国府のおひざ元にも伝説と石とがある。史跡多賀城跡の、多賀城碑の西北に字「志引」という地名があり、志引石と志引明神社があった。『宮城県史』民俗編や『多賀城町史』に伝説と説明があるが、三崎一夫「宮城県の石の民俗」に詳細な紹介と考察があった（註一一）。それによると

昔隣村（現仙台市宮城野区岩切）に通行の邪魔になる大石があり、村人が大勢で動かそうと引いたが動かない、一人の娘が自分なら動かせると言い、紫のタスキを掛け鉢巻を絞めて投げ飛ばしたら巨石は飛んでいき、ここに落ちた。元は千引石と言い、後に改めて志引石という。娘は観音堂に祭られている。

とあった。他の伝承記録では娘が観音の化身であった、そのため当地では紫のタスキと鉢巻は今でも使わない、などと大分変形しているが、大要は「つぼの石ふみ」伝説と同じである。多賀城の古代建築の基壇化粧の凝灰岩が岩切のものであるとか、礎石など石材の産地だった関係でこのような話になったのだろうか。伝承地が国府の中なのが気になるが、「つがろのおち」でもなく「大きさ四～五丈」もない、「伝・志引石」には加工痕があるから礎石だったのか、という程度である。

終わりに、「多賀城碑は壺の碑なり」、とする仙台藩の地誌『奥羽観跡聞老誌』（註一二）を読むと、多賀城の碑は長年草に埋もれていたのを水戸光圀の下問に対し伊達綱村が儒臣田邊氏に作成させた双鉤本を贈り、全国に知られた、として「壺の碑」の歌を並べている。上に掲げた考証を参考にしつつこれらの和歌を読むとまた問題が出てくるのであるが……。なお文字は『聞老誌』に従った。

新古今　前右大将頼朝

みちのくのいはてしのふはえそしらぬ　かきつくしてよ壺のいしふみ

同　仲　實

いしふみやけふのせばぬのはつはつに　あひみてもなほあかぬ君かな

同　顕　昭

おもひこそ千島のおくをへたてねと　えそかよはさぬ壺の石ふみ

良玉　懐円法師

日かすへてかくふりつもる雪なれは　つほの石ふみあとやなからん

山家集　西行法師

みちのくはおくゆかしくそおもはるる　つほの石ふみそのとの浜かせ

拾玉　慈　円

みちのくのつぼの石文ゆきてみむ　それにもかかしたたまとへとは

おもふことといなみちのくのえそいはぬ　壺の石文書つくさねば

夫木　清輔朝臣

碑やつがろのをちにありときく　えそよのなかを思はなれぬ

同　寂　蓮

陸奥のつぼの石ふみありときく　いつれか恋のさかひなるらん

幕末の仙台藩の国学者保田光則は『新撰陸奥風土記』（註一三）

の歌枕の章で壺碑は多賀城の碑であるとし、碑の章で多賀城の碑を解説し、南部七戸野辺地の間に壺村石文村にあったが埋めて今はない、と言う説も「うけられず」と一蹴している。

実物が不明なのに膨大な資料がある「つぼの石ふみ」であるが、歌学書の伝える「陸奥国の津軽にあり、大きさ四～五丈。坂上田村麻呂が弓筈で『日本中央』と刻んだ」とされる石、後世の伝説では「千引の石」は不明なままで各地に伝説だけを残す石となっている。都の歌人たちと幻のみちのくの歌枕は石の伝説の好例として取り上げたものである。

なおこの石があまりにも正体不明なので、「石ふみ」は「碑」ではない、「石踏」で「つぼ」というところにあった踏石の事ではという説もある（註一四）。和歌ではそれに書かれた碑文が問題になっているのでそれは無いと思うが。

（註六）『袖中抄』　河村晃生校注『歌論歌学集成』第四巻　三好平書店　平成十二年　所収
（註七）荻原恭男校注『芭蕉　奥のほそ道』岩波文庫　一九七九
（註八）古川古松軒・大藤時彦解説『東遊雑記　奥羽・松前巡検私記』平凡社東洋文庫二七　昭和三九年
（註九）大巻秀詮『御邦内郷村誌』明和～寛政ごろ、岩手県立図書館電子資料
（註一〇）中山太郎『増補日本民俗学辞典』初版昭和八年、パルトス社復刻版平成十年による
（註一一）三崎一夫「宮城県の石の民俗」　堀川豊弘編『北海道・東北地方の石の民俗』明幻社　昭和六二年　所収
（註一二）『奥羽観跡聞老誌』上　享保四年（一七一九）仙台叢書　昭和三年
本書では多賀城の碑は発掘されたのではなく草に埋もれていたのを、双鉤（文字の輪郭を線で写す）で碑文を紙に書き写したとある。
（註一三）保田光則『新撰陸奥風土記』万延元年（一八六〇）　歴史図書社復刻　昭和五五年
（註一四）「つぼのいしぶみ」『角川古語大事典』第四巻にこの説の概要を紹介している。

四．登天石と渡天石

次は実在する「尋常ならざる石」として「登天石」を取り上げて考察する。神社の神域、寺院の境内などから街道添いの休み場、村落の道の辻などに、普通の石より大きめで、時としては異形の石が柵をめぐらし祭壇をしつらえるなどして祭られているものの一つである。この石には大場博士の言う「影向石・手形石・馬蹄石・疣石・要石・鏡石・腰掛石…等」が多く、京都市内にも「源義経背比べ石」、「弁慶石」、「弁慶腰掛石」などがあり、最近気が付いた処では祇園山鉾の「行者山」の会所に「役行者腰掛石」があった。それらの石の中に『京羽二重織留』（註一五）の「名石」の章に

登天石　大沢の東　広沢の西山の上にあり。遍昭寺開祖寛朝上人ここより登天すといふ

又『菟芸泥卦（つぎねふ）』（註一六）に

児宮　広沢の池のほとり西の岸辺の傍の内にあり。

その北なる山で登天山と云所に伝るは広沢の僧正、一日登天し給へる地なり。その時寵愛の童衣の袖にすがってともに上りしが半より落ちてうせぬ。広沢の上の山に登天石有。寛朝登天の事、伝に不見。

とある。

寛朝（九一六～九九八）は宇多法王の皇孫で、平将門の乱を法力で鎮め、千葉県成田山新勝寺、通称成田不動を開くなどで知られ、この地に今も残る遍昭寺の開山で、真言宗広沢流の伝承者でもある。現在の寺は移転再建のもので往時は広沢池のほとりに大伽藍があった。池の南西、府道二九号線に接して「児（ちご）神社」があり、寛朝大僧正に仕えた稚児が長徳四年（九九八）の僧正遷化ののち悲しみのあまり池に投身した霊をまつると由緒書がある。ところが現在の説明板には僧正は「登天の松より竜と化して天に上がった」とされており、登天石は出てこない。近世の伝説も石も失われてしまったのだろうか。

『扶桑京華誌』（註一七）の名石の解説には広沢池の北の山上に「寛朝登天石」その傍らに「児石」があり、寛朝はこの石から登天した。昔は雨風の夜声明（寛朝は声明の達人でもあった）が聞こえることがあったとあり、その座禅石は「登天の松」に覆われていると書かれている。また『都名所図会』（註一八）の広沢池の記事にはこの山を遍昭山といい登天の松あり、寛朝がその梢より登天したと伝える、とある。石が松になったのは江戸時代も古いころのようである。

その神社の参道脇に、背もたれのある椅子のような形の自然石が置かれ、柵を回して「児椅子石。寛朝僧正が池の畔で座禅をされた時に稚児が座っていた石」であると説明板がある。【図版二、三】

寛朝僧正登天石が埋もれ、児石がいつの頃か山上からここに運ばれて児椅子石ということにされたのでは？とも考えたくなるような奇妙な形の石である。

「背もたれのついた椅子」の形の大きめの石は座りやすい形のた

【図版二】大沢池　児椅子石

【図版三】大沢池　児神社

めか「腰掛石」として、神や英雄、高僧の腰かけて休んだ石とされている事が多い。これも故加藤孝教授から「南太平洋の島々にある『マラエ』という石造の聖檀の上に神の座として宴席の座椅子のような背もたれのある石がある。日本の椅子型の『腰掛石』と関係あるのでは」とお教えいただいた記憶がある。

さて、京都叢書にはもう一つ「登天石」があり、『都花月名所』（註一九）に

登天石　比叡山東塔　遺教坊の門前にあり。これ法性坊の旧跡也。

また『都名所図会』（註一八文献）巻之三の比叡山延暦寺の章に

登天石　【東塔の南谷遺教坊の門前にあり。このほとりに法性坊尊意僧正の旧跡あり。菅神この石を踏んで登天したまふといふ】

と、比叡山延暦寺に菅神、すなわち菅原道真の登天した石があったとされている。

法性坊尊意僧正とは『北野天神縁起』などにも登場する天台座主にもなった高僧で、菅原道真の師とされる。大宰府で没した道真が怨霊となって尊意の坊に現れ、「これから雷神となって都を荒らすが、汝の法力で止めてくれるな」と依頼、尊意が「勅使が三回来れば従う」と答えたので激怒し、口から火を吐いて去った。火炎は尊意の法力で消えた。都を荒らす雷神に三回の勅使来訪をうけた尊意は鴨川の濁流を左右に開いて牛車で渡河し、御所に参内して修法を行い、たちまちに雷神を鎮めた……。というのが北野天神の伝説である。

江戸時代の文献であるから登天石はこの時代まで伝わっていたのであろう。ところが現在の比叡山延暦寺の東塔には天神の登天石というのはなく、大講堂への登り道の脇に「登天天満宮」の社があるのみである。【図版四】この付近は風化花崗岩で、やや離れた山頂付近には「将門岩」という変成岩の大きな露頭があるが、登天石と考えらえる石は現在の登天天満宮の社の周辺にはない。

登天天満宮の延暦寺による説明板には、尊意僧正が荒れ狂う道真の怨霊を説得し、それに応じた道真は十一面観音と化して登天した、と書かれている。北野天神の本地仏は十一面観音である。

【図版四】延暦寺東塔　登天天満宮

天神登天石は京都市内にもある。天神信仰が広まるにつれ北野天満宮の他にも菅原院天満宮、菅大臣神社、文子天満宮など、主要なものだけで二十五の天神社があり、二十五社巡りが江戸時代にあった。本来「天神社」は雷神など荒ぶる天の神をまつる神社で菅原道真以前からあり、京都にも「藁天神敷地神社」「五条天神」など北野天神以前の天神社がある。菅原道真はそれに列する「大政威徳天天満大自在天神」となったというのである。しかし地方ではそれらも混同されてしまっている。

京都の天満宮の一つに上京区堀川通寺町の「水火天満宮」がある。江戸時代元禄九年（一六九六）撰述の社伝によると、尊意僧正が三度目の勅使の来訪を受け、参内のために濁流の鴨川を渡る時、川端の石の上に道真が出現し、「師資（先生＝尊意は道真の師と伝える）の契約なかりせばいかでか通すまじきを」と言って登天した。勅により尊意の京屋敷のあった西陣一条下り松に道真を祭る社を建てたのが当社の始まりである、と記されている。創建は延長元年（九二六）で北野天満宮の創建（永延元年・九八七）より古く、日本最初の天満宮であると言う（註二〇）。

その「鴨川の川端の石」が移転と再建をくりかえした現在の水火天満宮の社殿の手前に「天満宮御臨降　登天石」として祭られている。石柵を巡らし石垣の上に黒い大きな石と褐色の石が重ねられている。天神出現伝説が江戸時代にすでに語られているので比叡山東塔の登天石を移した物ではなく、当社に昔から祭られていたのであろう。【図版五、六】

全国に天満宮は多数あり、天神の画像・彫刻も「綱敷天神図」「渡唐天神図」など異制のものも多数あるが岩の上に立つ天神像はまだ見た記憶はない、ただ天神の本地仏の十一面観音には蓮台でなく岩座上に立つものがある、代表的な例は長谷寺十一面観音で、多くが岩座に立ち、登山用具なのか錫杖を右手に持っている。

登天石の他に一例だけ「渡天石」がある、『都林泉名所図会』（註二一）の北山鹿苑寺（金閣寺）の章で

（鹿苑寺石不動）前に渡天石、独鈷水あり。

【図版五】京都市上京区　水火天満宮
登天石

【図版六】京都市上京区　水火天満宮

と記され、他にも『山城名跡巡行記』（註二二）などに

渡天石　在堂南

などとある。

現在でも「世界遺産金閣寺（鹿苑寺）」参拝の帰路ぞいに不動堂があり、その前に「独鈷水」「渡天石」の石標の建てられた石の井戸と高さ一メートルほどの石があるが、何者が渡天したのかは説明板もなく文献に記載も無い。この不動は石不動といい、不動明王も岩座に乗っているのだが。【図版七】

京都の石の伝説に詳しい井上頼寿『改訂京都民俗志』（註二三）には「空海登天石」とされている。高野山に伝わる弘法大師空海の

【図版七】京都市北区　鹿苑寺不動堂
渡天石

伝説の中に「大師は唐に留学中、謎の童子に導かれて空路（？）天竺を訪れた」という「弘法大師渡天伝説」があるが、それを意識しての説明であろうか。まだ出典は不明である。

街道沿いの名所から村の小道の路傍、神社の神域、寺院の境内の伝説にまつわる様々な石があるが、一般の民俗学の研究文献にほとんど見えない謎の伝承石としてこの石を取り上げたものである。

なお水火天満宮には登天石と並んで「出世石」というやはり大きめの石が柵を回し注連縄を張って祭られており、この類の石の信仰が広いものであるとうかがわれる。そういえば最近各地の神社に礫岩、それも角礫岩が「国歌『君が代』に記された『さざれ石の巌と』なった巌である」旨の解説板をつけて飾られる例が多いが、これもこの流れに関連するのだろうか。

（註一五）『京羽二重織留』新修京都叢書　第二巻、新修京都叢書刊行会　昭和四四年
（註一六）『蒐芸泥卦』新修京都叢書　第十二巻、新修京都叢書刊行会　昭和四六年
（註一七）『扶桑京華誌』新修京都叢書　第二十二巻、新修京都叢書刊行会　昭和四七年
（註一八）『都名所図会』新修京都叢書　第六巻、新修京都叢書刊行会　昭和四二年
（註一九）『都花月名所』新修京都叢書　第五巻、新修京都叢書刊行会　昭和四三年
（註二〇）水火天満宮宮司孝學暁氏ご教示
（註二一）『都林泉名所図会』新修京都叢書　第九巻、新修京都叢書刊行会　昭和四三年
（註二二）『山城名跡巡行記』新修京都叢書　第二十二巻、新修京都叢書刊行会　昭和四七年
（註二三）井上頼寿『改訂京都民俗志』平凡社東洋文庫一二九　昭和四八年（初版は昭和八年）

五．忘れられつつある自然石にまつわる伝説

以上、社会の変化や信仰の移り変わりにより消えつつある石の伝説を二つ取り上げて資料をまとめて見た。

みちのくの歌枕として多くの和歌に詠まれている「つぼの石ふみ」は文献の記載は多いが実物は残っていない例である。これが中世には神話の「千引（曳）石」と結びついて巨石を神の助力で動かす話となり、地方の民話にもとりこまれた。多賀城の碑が「つぼの石ふみ」か否かの論争の渦中にあった宮城県の多賀城跡にも伝わっているのが興味深い。様々な事項を後世に伝えるのが目的の「碑」に対して伝説は伝承が終われば消えてしまう。「つぼの石ふみ」と「千引の石」は関係ある話だと注意して各地に残る巨石伝説を再調査する必要があるだろう。

また「登天石」という不思議な名前の石があり、高僧や怨霊がこの石から登天したという伝説がある事を紹介した。嵯峨野広沢池畔

と比叡山東塔の「登天石」は記録を残しながら失われ、鹿苑寺不動堂の「渡天石」は名札のついた実物が残るが伝承があいまいである。幸いにして水火天満宮で実物・伝承が揃った例を知ることができた。ただし何分にも複雑な天神信仰の歴史のなかでどのように位置づけるのかはこれからの課題であるが、北野天神の本地仏十一面観音の岩座と関係がありそうだと考えている。

六、おわりに

思いがけず京都で十年以上を過ごし、その間に「都に住むみちのくの者」という視点から両者のかかわりを示すさまざまな歴史事件、人物などを調べてみた。歌枕の「つぼの石ふみ」だけは実物も不明、伝承も多岐にわたり手を付けかねていたが、水火天満宮の登天石の資料を検索中に偶然室町物語に「つぼの石ふみは千引の石」という物語があることを知って新しい視点からの検索をすることができた。折角なので未知の資料である「登天石」についても後半で取り上げてみた。やや大きい程度の普通の石が伝説によって信仰の対象になった例である。これも従来の考古学、民俗学、あるいは国文学の世界では知られていなかった分野である。

誰も知らない分野であるが、今回も多くの方々からご指導助言をいただいた。末尾であるが記して深謝を申し上げる。

（平成二九年八月一〇日）